

番外編	第 2 章	第 1 章
エルメーテの日記 253	新兵との付き合い方	連隊長閣下は心配性
200	121	7



# 第1章 連

連隊長閣下は心配性

#### 1 支えた男

8

いつも通り軍の仕事を終え、冬の寒い道のりをたどって家に帰りついた。そして玄関の扉を開けた ミルグラーフ王国の南西部。その地域の司令官であり、 最初に見たものは一 -妹のジャンナだった。 連隊長という肩書きを持つウリセスは、

「あ、ウリセス兄さん、 お帰りなさい」

夕食の準備でもしていたのだろう。右手の台所の方から小走りに駆けて来るその姿は、ごくごく

日常的なもので違和感はない。 「……ああ、 ただいま」

違和感があるとすれば、とウリセスは視線をゆっくりと動かした。 最初は、 ジャンナの後方の廊

下に。 次に食堂の扉に。最後は、 二階へと続く階段に。

レーア義姉さんなら」

ウリセスの視線の意味に気づいたのだろう。 ジャンナは、 瞬何かを思い出すような顔をした後、

こう言った。

「レーア義姉さんなら、 具合が悪くて部屋で寝てるわよ」

「……早く言え」

結婚して初めての出来事だったからだ。 置いて、彼は手燭の火をもらうや二階へと向かった。いつもより少しだけ足早になるのは、これが 妹の額に指をあて、ウリセスは軽く押すように小突いた。報告の優先順位がおかしいジャンナを

地でも、都から引きずってきた噂には悪い尾ひれがついて広まり、そして彼は孤立した。 として上層部に疎まれた。そして、結果的にこの田舎町に左遷されることとなった。そんな鄙びた かないという性格を持ち、 田舎町のレミニで結婚した。ウリセスは元々中央の軍に所属していたのだが、 いまから遡ることひと季節。 更に先の戦争で若くして出世してしまったために、 秋の初めに、 ウリセスとレーアは互いの顔も知らないまま、 、非常に目障りな人間、有能ながら融通が利 この

ウリセスに降ってわいた縁談。その相手が、かつて戦場で命を救った兵士の娘、 レーアだった。 そうして周囲のことなど気にせず、ただ兵士を鍛えることだけに注力して生きようと思っていた ヴァレーリアこと

かげで、ウリセスは日々の生活を不自由に感じることはなかった。 てきぱきと仕事をこなす性質ではない彼女は、 それでもひとつずつ着実に家事に励んだ。 都の実家から家出してきた妹の その

ジャンナにも、 レーアは粘り強く家事を身につけさせていた。

と、ウリセスは階段を一歩上るごとに心配になる。何しろ彼女はとても細身なのだ。少しは肉がつそんな妻は、これまで具合が悪いという理由で、家事を休んだことはない。余程悪いのだろうか 彼は思っていた。 いたと本人は言うが、ウリセスから見れば-明らかに耐久性に難のある身体つきだったために、 -触った感じも含めて、まだまだ全然足りていなかっ 病気に対する抵抗力も足りないのでは、

そしてついに、寝室の扉の前へとたどり着く。

バタンと乗り込むわけにもいかず、 ひとつ呼吸を整えた後、 ウリセスはゆっくりと扉を開けた。

「……レーア?」

そして、出来る限り静かに声をかけた。 しかし、返事はない。 気配は感じるので、 寝ているのだ

どかしさを募らせながら、 かび上がる。二人で寝るには十分な広さの寝台の、右側。 後方で扉を閉め、一歩一歩ゆっくりと近づくと、寝台の掛布が盛り上がっている様子が灯りに浮ろう。手燭を掲げるが、寝台まで光が届かないため、彼は足を踏み出した。 いつもの癖で自分の寝る方に回ったが、彼女は反対を向いていて、 ウリセスは改めて妻の前へと回る。 普段彼女が眠りにつく側だ。ウリセスは 細い背中しか見えなかった。も

レーアは、やはり眠っていた。それは、最初から予想していたことだったが、

いた。 のだろうかと、推測の域を出ない考えをウリセスが脳裏に浮かべていると、その瞼がぴくっと動 うほどではないようだ。ただ、その表情には疲労が見て取れた。疲れがたまって、風邪でもひいた 熱があるのかと、彼は膝をついて彼女の額に手を伸ばす。確かに少し熱いのが分かる。高熱との灯りでさえも、彼女の顔色の悪さは消し去れていなかった。

「ウ……リセス?」

えてしまいそうな声だ。それが、 瞼を震わせた後でゆっくりと開いて、 更にウリセスの不安をかきたてる。 オレンジ色の光を灯した緑の目が彼を見る。 小さくて、

「ああ……大丈夫か?」

呼びに行くことくらいだ。 なかった。彼が出来ることはと言えば、 彼は医者ではない。具合が悪ければ、 妻に調子を尋ね、 栄養をとって暖かくして寝る。 もしも手に負えなそうであれば、 それ以外の対処法は分から

囁くように語る妻の額に、 眩暈がひどくて……寒気が少し。 もう一度触れる。 熱を確認したかったのではなく、 寝ていれば治ると思うのですが……」 どこかに触れて

やりたかった。

12

「メシは食えそうか? 出来たら食べろ」

「すみません……いまは……ジャンナにごめんなさいと、伝えてください」

「そんなことは気にしなくていい。少し寝ていろ。また来る」

た時よりも大分ゆっくりとした足取りで部屋を出たのだった。 額に触れていた手を離し、彼は立ち上がった。「はい」と答える声を聞い てから、 ウリセスは来

食堂でウリセスは、 妹と二人きりで夕食をとっていた。

こんな食事風景は、生まれて初めてだ。年の離れたジャンナと実家で暮らした期間はほとんどな

く、妹は妹でウリセスを苦手に思い、二人きりになりたがらなかった。 ジャンナがこの家に住むようになって、ぶつかりながらも多少は改善しつつある兄妹関係も、

うして二人きりになると、まだまだ確かなものを形作っていないのが分かる。 しっかりつないでいてくれたのだと、思い知るばかりだった。 二人の間をレーアが

「あーもう……お通夜みたい」

ぼそっと、耐え切れなくなったようにジャンナが呟く。

は! のに、『寝かせてきた』しか答えないとか、 「レーア義姉さんの話でもいいから、少しは口を開けばいいじゃない。私がどうだったって聞いた それで話がおしまいとか! 商売の基本でしょ、

残念ながら、軍人になるべく祖父に育てられたウリセスには、 より責めることが上手な口だ。そして、何だかんだ言っても、 ぶすっとしながらも、一度しゃべり始めると妹の口は素早く回っていく。もっぱら、 その感覚は薄かったが。 商家の娘だと思わせることを語る。

「何か、食べやすいものを用意してくれるか?」

ウリセスの方がまだ食べられるものを作ることが出来ただろう。 かされて育ってきたせいで、包丁すらまともに握れないほどひどかった。野戦料理でも良ければ、 台所回りについて妹に聞けるようになったのは、 助かることだった。家出してきた当初は、

「え? ええと……」

食事を続けながら気長に返答を待つことにした。 何があったか、そして自分に何が作れるのか、必死に考えようとしているのだろう。 突然、予想外の話が振られたため、ジャンナは焦った顔で落ち着かなく視線を動かした。 ウリセスは、 台所に

「そ、そう! リンゴの蜂蜜がけならどう? 私が風邪をひくと、 母さんがいつも作ってくれ

第1章

れは、 てくれたものだ。小さく刻まれたリンゴに蜂蜜が絡められているだけという、手間のかからないそ いまほど体力のなかった子供の頃に、一度だけ大風邪を引いたことがあった。 ジャンナが思い出したようにある食べ物の名を挙げたため、 今日のレーアにも適切な食べ物のように思えた。 ウリセスはその記憶を呼び起こした。 その時に、母が作っ

「ああ、いいな……それを頼めるか」

妙な気分になった。 一緒にいた時間は短くとも、母の記憶はジャンナと共有出来るものなのだなと、 彼は少しだけ奇

た後で大笑いするわよ」 に食べさせるんでしょ? 「分かったわ。ふふ、おかしい。 やだ……想像したらおかしくなってきた。都の兄さんが聞いたら、 私が母さんと同じものを作って、 ウリセス兄さんが母さんみたい 驚い

その笑いにウリセスがつられることはなかった。 実家にいる長兄ランベルトを思い出したのだろう。ジャンナは、 けらけらと笑い出す。

止してしまった。とても想像出来る光景ではなかった。 それよりも、「俺が食べさせるのか……?」と、思いもかけないことを言われ、 見事に思考が停

それくらいしてもいいんじゃない? レーア義姉さん、 泣いて喜ぶわよ」

何を言ったところでジャンナを喜ばせるだけだと分かっていた。 それはない、と心の中で妹の言葉を即座に否定しながらも、 ウリセスは返事をやめた。 これ以上、

こうして、 穏やかに過ごすことが出来たのだった。 ウリセスにとって初めての妹と二人きりの夕食は、 レーアと母が助けてくれたおかげ

右手にはスプーンをつっこんだ小皿、 左手には手燭

いる側へと回る。それから寝台の横に台を運び、 そんな姿で、ウリセスは寝室へと戻ってきた。 その上に燭台とジャンナが作った皿を置く。 燭台に火を移すと、今度は最初からレーアの寝て

「ウリセス……?」

大きな物音は立てないようにしたが、 それでも彼女の眠りを妨げたようだ。 瞼が薄く開き、 唇が

彼の名を呼ぶ。

「少しだけでも、 食え」

ウリセスは、 彼女の上半身を少し起こすべく、 その首の後ろに手を入れた

眩暈が取れてはいないようで、 眩暈があるというので、 出来るだけゆっくり起こしてやる。 彼女はウリセスのシャツを握って一度強く目を閉じた。 「大丈夫か」と確認すると、 やはり

れない。 はぁ、とその唇から長い吐息が漏れた後、再びゆっくりと目が開く。予想以上にひどいのかもし

「医者を呼ぶか?」

「い、いいえ、大丈夫です……一口、いただきますから」

それと医者を呼ぶかどうかは、別問題だったが。 得したふりをする。どういう理由にせよ、食べる気になったのはいいことだと思ったからだ。勿論、 ように、ウリセスの意識を食べ物に持っていこうとする。ウリセスもとりあえずいまは、それで納 何も食べないと言ったら、すぐにでも医者を呼ばれると思ったのだろうか。レーアは少し慌てた

かと聞かれても、ウリセスは困っただろうが。 アに渡す。さすがにこの状態では、彼女に食べさせてやることは出来なかった。出来たらやったの た。そうすると、右の肩で彼女の背を支えられる。その体勢のまま、彼は台から小皿を取ってレー 起き上がった彼女が、また寝台に倒れないように、ウリセスは彼女の背中側に横を向いて腰掛け

「これは……ジャンナが?」

「ああ」

皿の中を見て、 レーアがふふと笑う。細かく刻まれたリンゴの中に、 ジャンナが見えたのだろ



もイレネオとセヴィが枕元に来るので、全部食べたい時でも残してました」 「うちは……誰かが具合が悪くなると、 オレンジの蜂蜜漬けでした。余った分が欲しいのか、 いつ

18

かもしれない。 今回はそうではなかったからだ。彼女の頭の中では、子供の頃の弟たちが枕元に迫ってきているの 熱でぼうっとしたまましゃべっているのが分かる。彼女は普段、末の弟をセヴェーロと呼ぶが、

「いいから食え。今日は残さなくてもいいぞ」

かった。 ここに、 レーアの弟たちはいない。 彼女の皿を狙う者は誰もいない のだから、 残す必要はな

「ふふ……そうですね。ウリセスも、これを食べたんですか?」

笑って、 少し気分が良くなったのだろうか。 レーアが、ぽそぽそとではあるが、 言葉を増やして

「ああ……一度だけだが、 な

「アロ家の味ですね……いただきます」

もう一度、 レーアはちょっとだけ笑って やっと、 それを口に運んだのだった。

## 動揺した男

ばかりしても仕方ない。 にも眩暈がひどいらしい。 翌朝になっても、 レーアは寝台から起き上がれなかった。熱が上がっている様子はないが、 やはり昨夜の内に医者を呼ぶべきだったとウリセスは後悔したが、 どう

と呑み込んで「行きましょうか」とウリセスを促した。 し訳ないと思ったが、向こうも慣れているのだろう。気にする様子もなく、口の中のものをゴクリ に戻ったかと思うと、 夜が明けきらぬ内に、彼は医者の家まで走って往診を頼んだ。 口をもぐもぐ動かしながら戻ってきた。手には、 髭の老医師は、 ちゃんとカバンがある。 カバンを取りに奥 申

ねているような声がするが、二人とも小さな声で、扉ごしでは何も彼に伝えてはくれない。 診察が終わるまで、 ウリセスは寒々とした廊下で待った。 中から時折、 医師がレーアに何かを尋

師が寝室から出てきた。 ただ待つということがどれだけじれったいものであるかと思い知らされたところで、 ようやく医

「どうぞ、 食堂の方に火を入れてます」

させるのは本意ではなかった。それに、ジャンナに朝食を余分に作るように伝えている。食堂で話 をしているところだった。 を聞くのが適切だとウリセスは考えた。 いますぐ事情を聞きたいのは山々だが、ここは寝室の前。外から聞こえる声で、 階下に医師を案内すると、ジャンナがちょうど食卓の準備 レーアを不安に

「こちらは?」

「妹です」

「おはようございます、先生。レーア義姉さんは、 大丈夫ですか?」

があるかと思っていたのだから。 正直助かった。ゆっくりと席につき、ひと息ついてから話を始める空気が整うまで、まだ待つ必要 ウリセスが切り出そうとしていたことを、ジャンナが待ちきれないように言葉にする。

「大丈夫ですよ……と言っても、 あまり楽観視されても困りますが

のが分かった。 老医師は、穏やかな表情を少しだけ曇らせながら答える。ウリセスは、 胃袋の裏がジリッとする

せてあげてください。 「とにかく、 ひどい貧血を治さないといけません。 野菜の少ない時期ですから、 ごまや豆、 出来るだけいろんなものを、 卵なんかを多めにするのがよいで たくさん食べさ

と卵が無造作に入り込んだ少し後。 ウリセスとジャンナの顔を交互に見ながら、 医師は静かに語る。 ウリセスの頭の中に、 ごまと豆

ぽんと、 医師に肩を叩かれた。

そして--ウリセスともあろう者が、 老医師によりにこやかな不意打ちを食らう羽目となる。

奥様は妊娠しておいでですよ。 おめでとうございます」

世界中から、 音が消えた気がした。

「おはようございます、 連隊長閣下」

「……ああ」

気がついたら、 ウリセスは職場にいた。

ため息が漏れる。 いものだと彼は後から思った。そして、どうしていま目の前にいるのがエルメーテなのかと、 自分でもよく分からない内に、 いつも通りに準備して出勤したようだ。習慣というのは、 恐ろし つい

ナが聞いたら、 「朝から不機嫌そうですね。 さすがのエルメーテも、 怒り狂いそうなことを、 ウリセスの複雑な心境を読みきることは出来なかったのだろう。 大丈夫ですか? 見当外れに問いかけてくる。 ジャンナ嬢が何かやらかしましたか?」 ジャ

### - いや……」

える方が楽に思えた。 なつもりはないが、うまく考えがまとまるとも思えない。 ウリセスは自分の席につき、もう一度息を吐いてから、 仕事に取り掛かる準備を始めた。 いまのウリセスは、 仕事用に頭を切り替

22

「やっぱり変ですよ、大丈夫ですか?」

うと自分でも分かっている。 エルメーテに不審がられるほど、いまの彼はいつもの様子ではないようである。 分かっていても、すぐさま修正出来そうにはない。 確かにそうだろ

ああ

れれば倒れるだろう。 ひとつの命でありながら、 は頑強に鍛え上げた。しかし、レーアは違う。彼女は、ごく普通の女性に過ぎず、ウリセスと同じ 少々殴られようが風雪にさらされようが、本当にウリセスは大丈夫なのだ。とにかく身体だけ 同じ強さを持ち合わせてはいない。 殴られれば砕けるし、 風雪にさらさ

そこまで考えて、ウリセスはいま自分がどういう状態であるのか分かった。

彼は、動揺していたのだ。

番身近だったのが、 これまで、彼が見てきた妊婦は、 ジャンナを身ごもった時の母だ。随分遅く出来た子だっただけに、 みな当たり前のような顔をして大きなおなかを抱えていた。 気苦労も多

かったはずだが、母は大きなおなかで仕事に家事にと奔走していた。

ていたのだから。 その時の母の様子といまのレーアのあまりのギャップに、彼は動揺したのである。 よほどの事情がない限り、勝手に腹の中で命が育ち、 時期がきたら生まれてくるものと思 妊娠なんても つ

のか? だが、現実のレーアは寝台の中だった。 妻を干からびさせるのではないかと不安がよぎる。要するに、あんな風で最後まで大丈夫な そんな大きな疑問が、ウリセスを動転させたのだ。 彼女の血まで吸い上げ、 貪欲に成長しようとする自分の

スは重要書類の一番上を取る。 めに出来ることは、 それらの記憶、想像を全て押しやり、 仕事しかなかった。右手で一発、 ウリセスは書類に向かい合った。ここでいま、彼が妻のた 自分の頬を叩いて動揺を追い払うと、 ウリセ

自分の仕事に戻ったのだった。 エルメーテは、 しばらく不審の目を向けていたが、 黙々と仕事を始めた男に声をかけることなく

一連隊長閣下、帰りましょう」

ただひたすらに、仕事に打ち込んだ一日だった。

気づけば定時を越え、 エルメーテが声をかけてくる。 だが、 今日は彼がウリセスの家に夕食を食

23

第1章 連隊長閣下は心配性

ないはずだった。 べにくる日、 というわけではない。 だから、 まるで一緒に帰るかのような誘いをかけてくる必要は

「先に帰れ」

ごしたため、 最後の書類に署名を終え、ウリセスは視線も上げずに答える。 まだ私的な状況について、 心の整理がついていなかった。 仕事に意識を切り替えて一日を過

ください」 「ああ、先に……ですね。 いいですよ。 それでしたら、 ちょっと閣下の家に立ち寄ることをお許

さすがに、 書類をとんとんと整え、 これには視線を上げた。 上に文鎮を置いたエルメーテが、 何食わぬ顔でそんなことを言い

「来るな。取り込み中だ」

先で伺ってすぐ帰りますから、閣下のご心配には及びません」 「そんなことは分かってますよ。その件で、ちょっとジャンナ嬢に話を伺ってくるだけです。

「嫌味か?」 本人を目の前に、 よくもまあ言えたものである。 ペンを置き、 ウリセスはようやく立ち上がった。

ご自分で知っておられますか? 「嫌味ですよ。 一日中無表情で、 職場環境の改善が必要でしょうから、 仕事の話だって『ああ』と『いや』としか返事されなかったのを、 原因を突き止めてきます」

だった。 つけているのは、さっさと白状せよ、さもなければジャンナから聞き出してくるぞ、 今日一日のウリセスの態度は、やはり良いものではなかったようだ。ここでエルメーテが突き ということ

ち寄らずとも近い内に嗅ぎつけてくるだろう。それらを考え、ウリセスは右手で自分の首を一度撫ずっとこんな調子で仕事をするわけにもいかない。エルメーテの情報収集能力を考えると、家に立 彼の中で、まだ何の決着も得ていないその事案を、 ため息をついた。 軽々しく口に出すのは憚られた。しか

「レーアに……子が出来た」

むにゃと歪めた後、その顔に手を当てて真顔に戻し、自分の机に片手をついて身体を支えるや、 の深い深いところからため息を落としたのだ。 それを言った瞬間の、 エルメーテの顔ときたら。 瞬ぽかんとして、 笑い 出しそうに顔をむにゃ

「はぁぁぁぁ……良かった。全然、大したことじゃなかった」

そして、 安堵の声で一人ごちるのである。 その言葉には、 ウリセスとしては十分異議ありだ つ

「大したことはある。レーアが、寝台から起き上がれない」

彼女の血の量が改善するのに、 一体何日かかるのか分からないというのに

いのに」

「あ、

出した。急ぐ手で外套を手に取るや、「お先に失礼します」と足早に帰り始めたのである。 いう間に、 ウリセスの憂鬱など、取るに足らないものと言わんばかりの軽さで、 ウリセスは置き去りにされてしまった。 エルメーテがいきなり動き あっと

また帰ることにしたのだった。 一人になり、ただただ静かな連隊長室を一度見回した後、 いまさら席に座る気にもなれず、

### 3 頼られた男

めて」 「おかえりなさい、ウリセス兄さん……気持ちは分かるけど、 私の顔を見てため息つくのはや

「いま帰った……すまん」

帰宅したウリセスを玄関先で迎えたのは、 昨日と同じくジャンナだけ

レーアが、 まだ起きられないことがそれで分かり、 彼は素直に妹に詫びた。 いまこの時、 妹が家

かれるのは、妹にとっては理不尽だったのだろう。 にいてくれることがどれほど心強いか。 何の落ち度もない自分の顔を見て、 V の一番にため息をつ

たわ。重かったんだから」 「義姉さんには、 ちゃんとご飯食べさせたからね。ごまは見つけられなかったけど、 豆は買って来

「ああ……助かる。 本当に」

の顔色がましになったか、気になっていたのだ。 妹の肩に手を置いてねぎらいながらも、 ウリセスの意識は二階へ行きかけていた。 少しはレーア

の前で、 扉を開けた。 外套を脱いで外套かけにかけると、ウリセスは手燭を受け取り、 少し逡巡する。 しかし、 何も迷う必要もためらう意味もない。 階段を上り始めた。 はぁと息を吐いて、 自分の部屋 彼は

「ウリセス?」

これほど驚いたのは初めてだろう。 部屋の闇の中から、 先に声が投げられて、 ウリセスは驚いた。 ただ、 妻に呼びかけられただけで、

「起きていたか……」

「すみません、 出迎えもせずに」

蝋燭の火の届かない寝台で、もそもそと起き上がろうとする気配。

い、そのままにしていろ。具合は少しはいいか?」

28

ウリセスは足を踏み入れ、部屋の燭台に火を移す。灯りが増え、部屋はようやく明るくなる。

「はい、朝よりは……お医者様まで呼んでいただいて、申し訳ありませんでした」

だろう。 を聞いた後、 したまま、仕事に行く準備をしたらしく、はっきりとしてはいないが、おそらく彼女は寝ていたの 横たわったまま自分を見上げるレーアの言葉に、ウリセスは今朝のことを思い出した。医者の話 彼は一度部屋に着替えに戻ったはずなのだが、レーアと話をした記憶がない。呆然と

見えた。 彼は寝台のレーアの側に周り、 枕もとの台に手燭を置く。そうすると、不安そうな表情までよく

という、使い古された言葉しか、掴み出せなかった。 の目を見ていると、 ウリセスは、 軍服のまま寝台の端に腰掛け、身体をひねって妻と向き合う。 何を言いたかったかよく分からなくなる。 結局 - 「……もっとメシを食え」 だが、こうして彼女

「まあ」と、レーアがちょっとだけ笑った。ウリセスにしてみれば、 笑い事ではないのだが。

食え……でないと、俺の子に吸い尽くされるぞ」

の腹の中にいるのが、 だから、言葉を足す。「俺の子」という言葉を足した時、まさにその通りだと彼は思った。 レーアに似ている子であれば、 きっと母から吸い取る栄養の量も慎ましやか

だったに違いない。 も納得出来る。 だが、 彼女の腹の中にいるのが、 自分の子だと考えたら、 この吸 い取り つぷり

「ウリセスの子……そうですね、 それならもっと沢山食べないと、 全然足りませんね

女が冷たい思いをするのではないかと心配になるほどだ。 とする。ウリセスは、その手を取ってやった。外から帰って来た彼よりとても温かな手で、 レーアも、同じ想像に行き着いたのか。少し笑って、それから手を掛布から出して彼に伸ばそう

「そうだ、俺の子に腹一杯食わせてやれ」

「俺の子」と言う度に、彼の中にひとつずつ石が積まれていく。

ウリセスにどれほど剣の力があろうとも、 彼には産めない。 その身の中に子を宿すことは出来ない。どう逆立ちし

もちろん、 だから、 彼の子以外にありえないことはちゃんと分かっているが。 いまレーアの腹の中にいる子が自分の子だと言われても、

腹の中の出来事が全て彼女自身に跳ね返るのだ。だから、こうして具合が悪くもなる。 レーアは違う。実感があろうがなかろうが、現実にその腹の中で子が育ち、良くも悪くも

男であるウリセスはというと、 実感を自分で積み重ねていくしかなかった。

だから彼は、

「俺の子」と呼ぶ。

レーアを苦しめてまで、

貪欲に生きようとする子を、

我が子で

29

すぐに実感出来るはずがな 第1章

あると骨の髄まで自分に教え込もうとした。

「ああそれは……それは、 本当に沢山食べなければ。 ひもじい思いをしているのです ね この

30

に腹の子が飢えているのだと、はっきりと理解した表情だった。 何ということでしょう、 とレーアは驚いた顔になった。 漠然とした意味合いではなく、 いままさ

「ああ……着替えたらメシを持ってくる」

ウリセスは触れた手を軽く揺らした後、 手を離して立ち上がった。

ンナー人だというのに。一人で騒いでいるのでなければ、 それから軍服の上着を脱ごうと手をかけた時、 階下が少し騒がしくなった。下にいるの 誰か来たということだ。 ジ

「ちょっと下りる」

レーアにそう言い置いて、彼は急いで部屋を出たのだった。

連隊長閣下、 さっきぶりです」

に受け渡す。 玄関にいたのは -エルメーテだった。 ジャンナは、 顔をむっとしたまま、 彼の相手をウリセス

ジャンナのこの顔は、 いつものことだ。 以前、 エルメーテは妹にひどいことを言ったらしく、

れ以来、 いるが、それでも妹は、前のようにのぼせた態度を見せることは微塵もなかった。 彼が笑顔でジャンナに迎え入れられたことはない。最近になって、多少は軟化してきては

急いで走って来たのだろう。エルメーテは、まだ軍服のままで、 白い息を弾ませていた。

「いまちょうど、ジャンナ嬢にこれの説明をしていたところです」

彼が「これ」と指すものは、ジャンナが手にしている陶製の小さな壺だ。

「だから、これは何なの? 変な色とにおい」

とても綺麗とは言いがたい灰色と茶色の混じった、沼の土や粘土のような色だった。 蓋を開けて中を覗いたジャンナが、不審に表情を曇らせている。 ウリセスからも中身が見えたが、

バーのペーストだよ。これを毎食、 パンに塗って食べさせてあげて」

「……その『レバー』って何って聞いてるの」

これまで食べてきたものと明らかに違う色合いが、どうにも妹を気味悪がらせているようだ。

「レバーって……まあ、お肉の一部だよ」

秋のイノシシ駆除の時に、 て一番新しい記憶。 動物の内臓は腐りやすく、 -エルメーテは濁した。動物の臓物だとは、 野戦訓練で生きた鶏をさばいた時に食べたことが、 普段肉屋にレバーが並ぶことはないため、身近とは言えない食材だった。 解体された端から肉と一緒に調理されていたことが、 女性にはっきりとは言えなかったのだろう。 古い記憶だった。ともあれ ウリセスにとっ

第1章

栄養価は高いものの、 動物の内臓というだけで、 慣れていない女性が拒絶反応を起こす可能性は

入ってしまった。パンに塗って食べればいいという手軽さも助かる。 「うち特製でね、うちの母さんも義姉さんも、これのおかげで眩暈知らずっていう優れものさ」 代々バラッキ家で、妊婦を助けてきた秘伝の一品と聞かされて、 ウリセスの方が真面目に聞き

いて。なくなる頃に、また持ってくるから」 「冬で良かったよ。 寒さのおかげで、数日保存が出来るからね。 温かくならないところに置いてお

方へと向き直った。 そう言ってまだ訝しげな顔をしているジャンナとの話を切り上げると、 エルメーテはウリセスの

「夜分、お騒がせして申し訳ありませんでした。 ではこれで……」

「おい」

「礼くらい言わせろ。 てきぱきと早口で帰りの口上を述べようとする男を、 それと、わざわざ来たんだ……メシも食っていけ。 ウリセスはひと言で縫いとめた。 ジャンナ、 用意して

メーテを見た後、 壺を持ち上げて、 「はぁい」と物言いたげに答えて、 くるくる回しながら眺めていたジャンナに話を振ると、彼女は一度ちらとエル 台所へと消えて行った。

「あー、すみません、本当にすぐ帰るつもりだったんですよ」

玄関で苦笑いしている男に、「そんなことより」と、ウリセスは自分の話を持ち出した。

「そんなことより……助かった」

謝することになるとは思わなかった。 ジャンナがいてくれることを有難いと思ったが、 まさか妻の妊娠に関して、 エルメーテにまで感

「いえいえ、どういたしまして。こんなこと、お安い御用ですよ」

御用というものがゴロゴロある。 エルメーテという男は、日常生活においては出来ることが本当に多い男だ。そんな男には、 そう言って笑みを浮かべる補佐官を前に、お安い御用とは、便利な言葉だなとウリセスは思った。 お安い

一方、ウリセスは軍務にこそ幅広く対応出来るが、 日常生活では出来ないことが多々ある。 妻の

妊娠という事案に関しては、本当に役立たずだ。 「後で、この辺でも手に入る、 お薦めの食材を書き出しておきますね」

しくこう言った。 更にそう言い募る補佐官に、 ウリセスはどうやって感謝を伝えるべきかと考えた。 そして、 彼ら

「困ったことがあったら、 俺を呼べ」

「うわぁ……そんな物騒な困りごとはいまのところないです」

かったようだ。確かに、ウリセスが役立てそうなことはそう多くはなかった。 ウリセスなりに考えた言葉だったが、エルメーテには腕っぷしという意味でしか受け入れられな

張ろうなんて殊勝な考えはありませんから」 「でも、もしそんなことがあったら、まっさきに助けを求めますよ。僕には、 自分ひとりで身体を

ながら、 そして、「寒いです。 エルメーテを食堂へ招き入れたのだった。 お話は、 暖かい部屋がいいです」と付け足され、 ウリ セスは苦笑を浮かべ

これは何ですか?」

人れを塗ったパンを出してやると、 寝台から半身を起こしたレーアに、豆と野菜がたっぷり入ったスープと、エルメーテからの差し 彼女は案の定、パンの上の粘土もどきをしげしげと見つめた。

「……レバーだ」

「レバー……聞いたことはあるような、 何でしたっけ」

「肉の……まあ、 肉だ。 エルメーテが持って来たから、 心配はいらない

「そう、なんですか? それじゃあ、 いただきます」

レーアは、 噛み付いてくるはずもないパンに、おっかなびっくり、 逆にゆっくりと噛み付いた。

はないだろうが、かといってとてもおいしいというものでもないようだ。 微妙な顔で噛み締めている。エルメーテが持ってくるのだから、極端に味がおかしいということ

「……何というか、 独特の匂いがありますね。それ以外は、多分……大丈夫です」

にほっとする。 もそもそと食べ続ける妻の様子に、ウリセスはほっとした。全部食べ終わるまで見届けると、 更

「お仕事で疲れているウリセスの手を煩わせて、本当に心苦しいです」

「俺の子がレーアの身体を煩わせて、心苦しいと言って欲しいか?」

いいえ、 そんな」

あまりに妻が小さくなってしまったので、 冗談だとウリセスはその肩を軽く叩いた。

「うんと食え、無理はするな。ジャンナも……俺もいる」

「はい、はい……ありがとうございます」

頼りにしていますという瞳で見つめられるのは -男としての誉れのひとつなのだと、

の時ウリセスは知ったのだった。

が起きたようだ。 レバー だが、 が動物の内臓であることをイレネオから聞いたらしく、 その頃にはすっかりレーアは貧血知らずとなっていて、 女二人の間で小さな騒動 パンに塗られたそ

は知る由もなかった。 食堂でのそんな姿を見るのが、 最近のウリセスの小さな楽しみのひとつとなっていたことを、

# 4 おまもりをもらった女

はない。 レーアの妊娠話は、 ひそやかに身内に伝わっていったが、それで何か大きな変化があったわけで

はあったが、レバーに感謝するレーアだった。 れるようになっており、大きな心配をかけずに済んだ。臓物を食べているということに複雑な気分 レーアの母が一度、 食事のおすそ分けという形で様子を見に来た。 その頃には彼女はもう起きら

彼女は思っていなかったし、 コンテ家は男兄弟ばかりで、 実際その通りだった。 彼らが現時点でレーアの妊娠に対して何らかの行動を起こすとは

そう――男兄弟は。

ちらさま?」とジャンナが反応している声が聞こえてくる。 かった。ジャンナでは分からないお客の可能性もあったし、悪人と気づかずにうっかり扉を開けて しまう危険もあったからだ。 アロ家の玄関がノックされた時、 一番近くにいたのはレーアではなかった。「はぁ 台所にいたレーアもまた、玄関へと向

「どちらさま?」

眉間にうっすら怪訝な皺を刻んで、扉の向こうを睨みつけている。 「どちらさま?」ともう一度問いかけているが、扉の向こうから返事はない。そのためジャンナは、 レーアが到着した時、ジャンナは無謀にも扉を開けていた-なんてことはなかった。 彼女は、

返事の代わりに、 コン、コココンというリズムでノックされる音がレーアの耳に届いた。

「あっ!」

手を伸ばし、 その音に、 彼女はおもむろに鍵を開けて扉を開く。 慌ててレーアは足を踏み出した。「え、 レーア義姉さん?」と驚くジャンナの横から

キョロキョロした後に視線を下ろした。 級な人形のように可愛らしい。 そこには、 淡い金髪の女性が立っていた。 背の低いそのお客を、 抜けるほど色が白く、 最初ジャンナは見つけきれなかったようで、 青い瞳はぱっちりしていて高

「まあ、可愛い子。どこのお遣いかしら」

38

どいいくらいだ。甥や姪を可愛がるかのように、彼女はその少し小さなお客様に視線を下げたのだ。 そんな義妹を尻目にレーアは、その小さくも可愛らしい女性に問いかける。 レーアよりももっと背が低いため、背の高いジャンナからすると、ちょっと膝をかがめてちょう

「ピエラ義姉さん、 今日はどうなさったのですか?」

「え?」と、レーアの横でジャンナが驚きに震えた。

ー え ? 義姉……え?」

落ち着かない視線で、ジャンナはレーアを見たり、 お客を見たりと忙しそうにしている。

方も、興味深そうにジャンナを見上げている。

「ピエラ義姉さん、こちら夫の妹のジャンナです。 ジャンナ……こちらは、 トビア兄さんの奥さ

「ええっ!!」

の前に心底びっくりした声をあげた挙句、 初対面の二人がお互いを分かるように紹介したのに、ジャンナはあまりに正直過ぎた。 二度見どころか三度も四度も見るのである。

「ピエラ義姉さんは、二十歳よ……ジャンナより年上。ほらご挨拶して」

失礼過ぎる義妹の背中を叩いて、 しゃんとさせる。こんなことをレーアが冗談で言う必要はない。

ただ、気持ちは分からないでもなかった。 るだろう。 見た目だけで言えば、 ジャンナの方が遥かに年上に見え

着けさせなければならなかった。 「ジャ、ジャンナ=アロです……ここの主、 戸惑いながら、ジャンナが探るような挨拶をする。まだまだジャンナには、 ウリセスの妹です。 ようこそ、 いらっしゃいました」 礼儀をきちんと身に

そんなジャンナににこりと微笑んで、ピエラが会釈する

えていてね」 「ピエラ義姉さんは、声が出ないの。だから、 ノックで誰かを知らせてくれるのよ。 ジャンナも覚

「わ、分かったわ」 訪問者の態度を不審に思われる前に、 レーアは言わなければならないことをさっくりと説明した。

人に義姉のことを説明するのは、 よく分からない状態だった。逆に、それで良かったのではないかとレーアは思った。レーアもまた、 多くの戸惑いがある内にそんな情報を提供したため、ジャンナはもはや何に戸惑っていい 慣れていなかった。 上手に説明出来たかどうか、自分でもよく分 のかも

「ピエラ義姉さん、 寒い中どうなさったんですか? あ とりあえず入ってください。 すぐ暖炉に

## 火を入れますから」

そんな自分の中の戸惑いを誤魔化すように、 レーアは兄の妻を招き入れたのだった。

40

ピエラのことを、レーアは昔から良く知っている。

妹の末娘だったが、 この街に引っ越して来たその日に挨拶をしたのだ。彼女は、 ピエラはいつも家族に不安な目で見つめられていた。 隣の家の娘だった。三人兄

時々聞こえてくる隣家の会話に、レーアも心を痛めたものだ。 「こんな娘で、貰い手があるだろうか」「器量は良いが、まともな結婚は無理かもしれん」

ていくのが見て取れた。 かった隣家は、それを断り続けてはいたが、 いう。男と言っても、三倍以上年の離れた、もはや老人と言ってもよい相手だ。金に困っていな 成長しても少女のような可愛らしさを残すピエラは、金持ちの男に何度となく求婚されていたと あまりに頻繁に遣いがやってくるため、

そんな中、 いまから三年ほど前にコンテ家の長男トビアが夕食の席でこう言った。

「父さん、私は隣のピエラと見合いをしようと思っています」

ビアを問い詰め始め、 コンテ家の食卓は、 その直後から猛烈な騒ぎに包まれた。父と母は驚き、詳しい説明を求めてト 次男ルーベンはこれは面白いとばかりに、 ゲラゲラと笑い転げて茶化した。

ることに集中力を費やしていた。 末弟セヴェーロは「兄さん頑張れ」と応援を始め、 三男イレネオはそんな家族の皿から肉をくすね

ものの、 ピエラにそんな素振りを見せたこともなかったのだ。 レーアも驚いた。トビアは真面目な役所勤めで、 隣の家と普通に近所付き合いはしていた

家柄も確かなものです」 ろ結婚してもいいでしょう。隣家のピエラは十七です。年齢差もおかしいものではありませんし、 「実は、隣家の親戚が役所に勤めていらして、私に相談されました。私も二十三ですから、そろそ

の空気を重くしていった。 何一つ問題はないと言わんばかりのトビアの言葉に、 コンテ家の誰もが知っている事実が、

「向こうは何もしゃべれないんだぞ、うまくやっていけるのか?」

それを口に出したのは、父だった。家長として、言うべきことだという決意が、 その には

思えば良いのです。 えますから、 「私は人の二倍しゃべれます。それで釣り合いが取れるでしょう。無口で物静かな嫁をもらったと どうぞ言ってください」 子供が生まれたら、 私が言葉を教えます。言葉以外に何か他に問題があれば老

それ以外には何も問題なかろうとばかりにトビアに切り捨てられ、 父と母は言葉を濁しつつも賛

第1章 連隊長閣下は心配性

成しかねる気配を漂わせた。

「なあ、 兄貴。ピエラが金持ちのクソジジィの後妻にされるのがかわいそうで、 嫁にもらってやる

ニヤニヤしながら問いかけた。 膠着しそうな気配の 中 ついに自分の皿を狙い始めたイレネオを手で弾き飛ばしたルーベンが

「そうだ」

即答だった。

ちまったらどうすんだ?飽きんのか?」 「ああ、やっぱりな。じゃあ、 かわいそうで結婚したとして、そのかわいそうが兄貴の中から消え

「馬鹿か、お前は。かわいそうなんてものがなくなったら、ただの夫婦になるだけだ」

ろだけはソンケーしてるぜ」 「ぶはっ!! ぶははははは! さすがだぜ兄貴! 俺ぁ兄貴と大部分は合わねぇが、そういうとこ

盛大に笑いながら、ルーベンは自分の皿の上の肉にフォークを突き刺し、 口の中に押し込んだ。

隣のイレネオが、「やっぱり駄目か」と肩を落としていた。

「素敵だよ、トビア兄さん。僕は、トビア兄さんを絶対に応援するよ!」

すっかり自分の皿の肉を全滅させられたことにも気づかず、 セヴェーロが身を乗り出して兄に声

返した。 援を送り続ける。 レーアも、 そこでようやく自分の意思を示すところだと思い、 同意の頷きを繰り

結婚した。 そんな家族会議の末についに父母は折れ、 トビアはピエラと形式だけの見合いをした後に、

そんな彼女が、言葉の代わりに刻む音が -コン、コココン。

突然訪れた義姉ピエラを食堂に通し、 レーアは暖炉に火を入れようとした。 この場合は、 台所の

かまどに残っている炭を持ってくることになる。

「それは私がやるから、レーア義姉さんはお客様の相手でもしてて」

しかし、仕事はジャンナに奪われた。レーアの身体のことを気遣ってくれているのもあるだろう

が、ピエラと二人で残されるのも落ち着かないと思ったのだろう。

近い距離で話し始めた。 ジャンナが炭を持ってきたり、お茶の用意を始めたりする中、 レーアはピエラと隣同士に座って

「今日はアデーレちゃんは一緒じゃないんですね。 お母さんに預けてこられました?」

とても寒がりだった。 外套と襟巻きを外したピエラは、 それでもまだ、 もこもこと沢山の服を着込んでいた。 彼女は

は、この子を目の中に入れても痛くないに違いないとレーアは信じていた。 初孫で、レーアの姪でもある。金茶の髪と緑の瞳。ふくふくほっぺのトビアの女神だ。 レーアの問いに、こくこくとピエラが頷く。アデーレは、 彼女の娘だ。去年生まれたコンテ家の きっと長兄

44

を預けに行く。 買い物などに行く時、小さな身体のピエラは子供と荷物を両方抱えるのが大変なので、 いまはコンテ家が手狭なため、兄夫婦は近所に貸家住まいをしているのだ。

よく隣家を訪ねるのは、 だった。「私だって初孫をもっと可愛がりたい」と、愚痴っていたものだ。 レーアの母は、 食堂で働いているので頻繁に預かることが難しく、それが不満のひとつのよう 孫が預けられているかもしれないと思っているからだろうとレーアは踏ん 食堂から帰ってきた時、

が思っていたら、ピエラがその袋を開けて中に手を入れる。 今日も娘を置いてこざるを得ないほど、 彼女は大きな袋を抱えて来ていた。 何だろうかとレーア

れをレーアに差し出す。 そこから出てきたのは - ふかふかの毛糸で編んである、 生成り色のひざ掛けだった。彼女はそ

「まあ、ピエラ義姉さん、 これを……私に?」

終わりのこの時期に、 にこにこ微笑みながら彼女に渡そうとするピエラに、 突然どうしたのかと。頷いたピエラは、 一番の疑問を投げかける。もうすぐ冬も 自分のおなかを両手で押さえた後、

レーアのおなかを見た。

「まあ、私の身体が冷えないようにですか?」ありがとうございます」

恵まれて幸運だと思った。 それで合点のいったレーアは、 この心配りはとても嬉しいものだった。男兄弟とは、 血の繋がった姉妹はいないが、ピエラといい、ジャンナといい、血の繋がらない義理の姉妹に 自然と頬がほころぶのを感じた。姉妹のいなかったレーアにとっ やはりこういうところが違う。レーアに

を編んでくれるなんてと、 妊娠の話をコンテ家に伝えたのは、ほんの少し前の話だというのに、 レーアは本当に喜んだ。 もうこんな大きなひざ掛け

ではないか。全て色は生成り。きっと、同じ色の毛糸を大量に買い込んだのだろう。 また袋の中に手を突っ込んだかと思うと、次に出てきたのは長い靴下。更にショールまで出てくる ひざ掛けを受け取った彼女に、 ピエラは満足そうに微笑んで……しかし、そこで終わらなかった。

漏らしてしまった。 どれほど自分が冷える心配をしてくれているのかと、おかしさのあまりにレーアはふふふと声を

「ありがとうございます、 ピエラ義姉さん。こんなに沢山

礼を言う頃には、 の上に畳んだひざ掛けを載せ、 ジャンナが温かいお茶をいれて二人に出してくれた。 その上にショールを載せ、 更に靴下を載せた状態でレー -アがお

> 第1章 連隊長閣下は心配性

のかと思ってレーアが見つめる。 で人の肌のように思えた。 カチャカチャと陶器が触れ合う音がする中、 それはとても小さな毛糸の人形だった。 最後のひとつをピエラが袋から取り出す。まだある 生成り色の人形は、 まる

46

それをレーアの膝の靴下の上に、 ゆっくり動く。 彼女はちょこんと載せた。 見上げるように近づいたピエラの唇

『お・ま・も・り』

が心を尽くしてくれたのが、痛いほど伝わってくる。 声はなかったけれども、 レーアにはちゃんと聞こえた。 無事、 子供が生まれるようにと、 ピエラ

「はい、はい……ありがとうございます」

毛糸の愛がうずたかく膝の上に積まれる中、 とても苦労させられたのだった。 レーアはそれを崩さないようにピエラの手を取るの

・ビア兄さんは、 本当に良い結婚をしたと、彼女は信じて疑わなかった。

「何だ、これは?」

ショールを羽織り、 夜の寝室で、夫にそう問いかけられた時、 ひざ掛けをしていた。 靴下は、 レーアはぷっと笑ってしまった。 ひざ掛けの下に置いてある。 寝台脇の椅子は、

「トビア兄さんの奥さん……ピエラ義姉さんが贈ってくださいました。 そんな厚着の椅子の前に、 彼が立っている姿というのがとても面白かった。 身体が冷えないよう

「そんなに冷えるのか?」

でくるので、大丈夫ですと否定する。 沢山の贈り物を怪訝に思ったというよりは、 レーアが冷えることそのものへの心配が夫から飛ん

かなか笑いを止めることが出来なかった。 「義姉さんはとても寒がりなんです。だから、私にも同じように気を遣ってくださったんですよ」 **久しぶりに見たピエラが相変わらずだったのと、夫の見当はずれの心配がおかしくて、彼女はな** 

置かれた大きな皿がある。 向へと動かす。 ウリセスの方へ近づきながら、レーアは視線を椅子から壁の方へと動かした。 三穂の麦が入った皿だ。ウリセスも彼女に釣られたのか、 その先には、 視線を同じ方 棚に

レーアは言った。 その皿に、 今日ピエラにもらった毛糸の人形も一緒に入れていた。 これは何かと聞かれる前に

「おまもりもいただきました」

とっておきの白いハンカチで、 レーアは人形をくるんだ。 裸のように見えて、 寒そうだったから

赤ん坊がおくるみに包まれている姿に、それはよく似ていた。

「冷やすな」という新たな警句が増えそうな予感が、 ウリセスは、「そうか」と答えた後、隣にたどりついたレーアに「本当に寒くはないか」と聞 子供が出来ると、男は心配性になるものらしい。何を心配すればいいのかさえ分からないよ 寒さという具体的な心配の種を手に入れてしまった。「二人分食え」「走るな」に次いで、 レーアの中に芽生えた。 い

「もうすぐ春ですから、大丈夫です」

安心させるために言った言葉に、ウリセスは少しばかり苦い表情を浮かべた。

「これから春まで、 仕事が忙しくなる。 帰りが遅くなる日も多くなるだろう」

われる。 く理解した。もうすぐやってくる春季の一日目-「何かあるのですか?」と問いかけると「新年祭の準備だ」と返された。それだけでレーアは、 この田舎町のレミニも例外ではなかった。 いわゆる春朔の日の午後から、新年祭が執り行

 $\lceil \dots \rfloor$ 

がして、はっと顔を彼に向ける。 レーアが新年祭に思いを馳せている時、 ウリ ・セスがそんな彼女を何とも複雑な表情で見ている気

「……キャベツか?」

複雑な表情のまま疑問形で語られた言葉に、 一瞬レーアはきょとんとした。 ウリセスの口から、

かけを乗せて夫を見上げる。 唐突に野菜の名が飛び出したのである。 キャベツがどうしたのだろうかと、 レー アは緑の瞳に問 い

「春朔の……野菜だ」

く食べられる野菜がキャベツだった。次点でソラマメが食卓に上る。 付け足されて、レーアはやっと理解出来た。 冬朔の日にカブを食べたように、 春朔の日に一番よ

パイを焼くこともある。 「そうですね」とレーアは相槌を打った。単純にキャベツを刻んでスープに入れるだけの場合もあ キャベツの中に具を詰めて巻き、 煮たり蒸したりする場合もある。 逆にキャベツを具にして

アは思ったものの、 冬の時でさえ、どうでも良さそうだったというのに。キャベツがそんなに好きなのだろうかとレ こともあると思った。ウリセスが料理に口出しをすることは、ほとんどない。 「ジャンナに、キャベツを買うように言っておくとい 改めて問いかけることはしなかった。 い」と言われて、 レーアは頷きながら珍し 自分の誕生季である

結婚して半年。 「私もひとつ年が増えます」とレーアは、 ウリセスの誕生季を追いかけるように自分の誕生季が来ることを、 キャベツの次に自分の誕生季の話をウリセスに告げた。 レーアは何だか

ああ: ・そうだな

#### 立ち読みサンプル はここまで

です」 ですよ、 「セヴェ あの二人。 ーロも春生まれなので、これから夏までイレネオと同じ年なんです。 トビア兄さんとルーベン兄さんも十一ヶ月。 私だけ真ん中でのけ者だったん 十一ヶ月違いなん

50

兄弟についてぺらぺらと話し始めた。 ウリセスがレーアの誕生季を覚えてくれていたらしいことに気をよくして、 ついレーアは実家

の間だけは家で一番年下ではないということが嬉しいのか、 というものが発生する。 こいうものが発生する。セヴェーロは春の下月の生まれ。イレネオは夏の上月の生まれだった。年齢の加算は、生まれた季節の朔日にされるため、生まれ月の関係で双子以外でも同じ年の豆 セヴェー 口はその時期になると上機 -の兄弟

「そうか……確か……二十三になるのか?」

少し考えなければならなかった。 ウリセスの返答は、 不思議な数字と一緒に出てきた。 レーアは家族の話をしていた言葉を止め

「それは……私の年齢ですか?」

おそるおそる確認した。 い思いをしただろう。 兄弟 四人の話をしている最中に、 これで兄弟の誰かの年齢を勘違いしているだけだったら、 まさか自分の歳の話に巻き戻るとは思っていなかったレーアは、 とても恥ずかし

「そうだ、 確かいま二十二だと思ったが?」

アは胸が温かくなる気がした。結婚当初、 ると思ったのかもしれない。慌ててレーアは「そうです、 いなかったことも彼女は思い出したが、 しかし、 結婚して、 レーアの怪訝な反応に、ウリセスまで怪訝な表情を浮かべる。自分の記憶が間違って 改めて年齢を口にすることはなかったが、それを覚えてくれていたのだと思うとレー いまは素直に喜ぶことにした。 ヴァレーリアという名前の方は、 そうです」と首を大きく縦に振った。 ウリセスに覚えられて い

「また春には六歳違いに戻りますね」

「そうだな……」

かったことが、いまは当たり前に出来るようになっている。 スとその「雑談」が出来るいまを幸せだと思った。結婚したばかりの頃には、 たったひとつの年齢差に大きな意味はない。 ただの雑談に過ぎない。 それでも、 とても想像が出来な レーアはウリセ

とに近くなっていけるの のだった。 まだまだぎこちない部分がありはするものの、 かと思うと、 早く次の季節 こうしてウリセスと一緒にひとつ季節を越えるご 春がこない かと、 レーアは心待ちにする

第1章 連隊長閣下は心配性